UNISEC Workshop 2003

at Hokkaido Institute of Technology

第2回ワークショップ開催。

2003 年 12 月 13 日と 14 日の両日に北海道手稲にある北海道工大で UNISEC2 度目のワークショップが行われました。 積もった雪の残る会場に日本中から 128 人の人たちが集まりました

講演は、CubeSat やロケット開発など各大学や団体の一年間の活動報告 2日間にわたって行われました。



講演では、単なる発表だけではなく、同じような研究を している他の大学と情報交換をしたり、参加された専門家 の方からアドバイスを受けたり、参加者同士の交流がさか んにおこなわれました。



招待講演では JAXA (宇宙航空研究開発機構)の中川敬三さんと、中村博行さん は、JAXA で実際に使われている衛星設計支援システムやロケットの打ち上げ 安全対策などはついて伺いました

交流が多い、といえば今回のワークショップもまさに宇宙を目指す人たちが お互いを助け合い高めあえるような企画がいっぱいでした。 1日目の夜の懇親会で交流を深めた後、2日目の昼ではUNISON会議が行われ、 学生同士がこれからの UNISON のありかたについて、話し合いました。 そして、2日目の午後は、グループ討論が行われました。 グループ討論では、参加者がそれぞれ「周波数問題」、「地上局ネットワーク」 「衛星の商業利用」、「ロケット打ち上げ安全基準」、「板倉コンペ」の議題を持つ グループの中から自由に参加したいグループを選び、他の大学や団体、また アドバイザーの専門家の方たちとの話し合いを通じて、助け合って問題を 解決していくことを目的としています。 1つの大学では解決できない大きな問題を、大学や団体同士が助け合 解決していこうという UNISEC ならではのイベントといえるでしょう。

ウークショップの内容はついて、ウェブで紹介しています 各団体の代表者の自己紹介ムービーもあります

http://www.unisec.jp/ws2003/

現在、UNISEC では3つのワーキンググループが活動をスター しており、新ワーキンググループも続々と企画中です ワーキンググループでは、学生のほかに、関心や 知識をお持ちの一般会員の皆様のご参加も お待ちしております。

	Frequency
	周波数問題
	醍醐加奈子さん
	大学が打上げる人工衛星が使り 信周波数の申請や利用につい
	るワーキンググループです.
Itakura petition	周波数の申請や使用は、無線1 れている方をはじめ、諸官庁・
板倉コンペ	など多くの方とかかわりを持 私達は皆様と良い関係を築き、
kのイベント「板倉コンペ」 員会として、企画・広報・	る開発・運用を目指していま ために必要な知識を補ってい
います。11 月末に群馬県 行う予定の板倉コンペは、	このワーキンググループを通
クコンペといって、気球か	しています。 皆様からのアドバイスやご指
t (トレーニング用衛星) を それが自律的にパラフォイ	にこのワーキンググループの? ながりますので、ぜひご協力?
操縦して、目的地点にいか りるかを競う大会です。	たします。
	詳 リモートセンシング:un
参加ご希望の方は メールでどうぞ	 ラビードビンフンク・un 周波数問題:unisec_fre 板倉コンペ:unisec=itak

Cow

UNISEC 秋

の実行委

運営を行

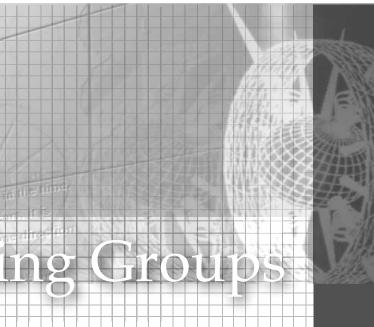
板倉町で

カムバッ

Б CanSa

放出し、

ルなどを こ近く降



Remote Sensing リモートセンシング 赤松幸生さん 国際航業 (株) ることが予見されます。 そこで、リモセン利用 WG では、近い 用する通 て検討す こ従事さ や専門家 ちます。 秩序あ す。その くために

して勉強 UNISECのNPO会員と学生会員の方で、 UNISECの自助・互恵精神に則り、主体 摘がさら 的かつ前向きに活動頂ける方のご参加を 活性にも 期待しています い飼いい

細はhttp://www.unisec.jp/member/wg.htm sec-rimosen-owner@egroups.co.jp qwg-owner@egroups.co.jp ura-owner@egroups.co.jp

超小型衛星も実際に宇宙で運用される。 うになり、実利用が近い将来の課題とな

将来の実現が見込まれる超小型衛星のし モートセンシングを対象に検討し、斬新 で魅力的な実利用ミッションを発掘し 会にアピールすることで、超小型衛星の 将来を切り開くことを自指しています このような実社会における新たな利用を 創造するには、柔軟な発想をもつ学生と さまざまな経験を持つ社会人が接点を持 ち、力をあわせて未知の領域を切り開く ことが不可欠と思います。